

ぶどう「巨峰」の夏季せん定による結実向上技術							
[要約] ぶどう「巨峰」に対する収穫後の徒長枝（新梢長90cm以上）の夏季せん定処理は、果実品質に影響することなく、処理翌年以降の開花期までの新梢伸長を抑制し、結実性が向上する。							
三重県農業技術センター伊賀農業センター果樹担当					連絡先	0595-37-0211	
部会名	果 樹	専 門	栽 培	対 象	果樹類	分 類	指 導

[背景・ねらい]

ぶどう「巨峰」の有核果栽培においては、樹勢が旺盛で結実が不安定になりやすいことが問題である。結実性向上、樹勢調節には種々の技術があるが、せん定法に関しては、冬季の弱せん定が基本となっている。一方、りんご等のわい化栽培においては、樹勢調節、樹形維持に対して夏季せん定の効果が認められており、ぶどう栽培における適応も有効と考えられる。そこで、夏季せん定が結実性の向上及び果実品質に及ぼす影響を検討した。

[成果の内容・特徴]

1. 徒長枝（生理落果終了後は70cm、収穫後は90cmの新梢）の夏季の間引きせん定処理により（表1）、処理翌年以降の1房当たりの有核果粒率は増加する（表2）。
2. 処理により、開花期までの新梢伸長が抑制され、新梢長50cm以上の新梢本数割合が減少し、樹勢は抑制される（表3）。
3. 収穫後の処理では、果実品質に対する影響はなく、収穫前の処理では果色と酸が低下する（表4）。

[成果の活用面・留意点]

1. 4倍体ぶどうの有核果栽培において適用でき、結実性向上が期待できる。
2. 収穫前の処理では、結実性向上、樹勢抑制の効果は大きいですが、果色低下の可能性があるので、収穫後の処理が望ましい。
3. 処理時期に基準の長さ以上の枝であっても、翌年の結果母枝として必要と思われる枝はせん除しない。また、せん定量は樹勢によって調節する必要がある。

[具体的データ]

表1 処理の概要

処 理	処理時期	せん除する 新梢の長さ	せん定量（1992、1993年平均）	
			全新梢に対する 本 数 割 合	総新梢長に対する 長 さ 割 合
6月処理区	生理落果終了後 （6月下旬）	70cm以上	13.5%	26.0%
9月処理区	収穫後 （9月下旬）	90cm以上	16.4	34.0

表2 ぶどう「巨峰」の結実性に及ぼす夏季せん定連年処理の影響

処 理	1房当たり有核果粒数および有核果粒率					
	処理1年目 有核果粒数	有核果粒率 （%）	処理2年目 有核果粒数	有核果粒率 （%）	処理3年目 有核果粒数	有核果粒率 （%）
6月処理区	36.4	77.3	45.0	98.1	25.5	79.7
9月処理区	29.0	60.1	38.2	93.2	23.0	66.2
対 照 区	19.7	36.8	19.7	93.0	22.8	56.1

表3 ぶどう「巨峰」の開花期の新梢の長さおよび樹勢に及ぼす夏季せん定連年処理の影響

処 理	新 梢 長 (cm)			新梢長50cm以上の本数割合 (%)		
	処理1年目	処理2年目	処理3年目	処理1年目	処理2年目	処理3年目
6月処理区	47.2	40.8	35.2	35.7	33.0	23.8
9月処理区	53.6	45.2	34.0	48.2	38.0	19.1
対 照 区	67.2	49.8	43.3	61.2	42.4	38.4

表4 ぶどう「巨峰」の果実品質に及ぼす夏季せん定連年処理の影響（処理後3年平均）

処 理	果房重 (g)	果粒重 (g)	果 色	糖 度 (%)	酸 (%)
6月処理区	287.7	10.2	7.9	17.6	0.49
対 照 区	290.6	10.5	8.9	17.5	0.54
9月処理区	288.5	11.7	8.5	17.3	0.54
対 照 区	283.2	11.2	8.7	17.5	0.53

注) 上段の6月処理区、対照区は1991～1993年、
下段の9月処理区、対照区は1992～1994年の平均

[その他]

研究課題名：ブドウ巨峰の生育期せん定による樹体管理技術の確立
 予算区分：県 単
 研究期間：平成6年度（平成3～6年）
 研究担当者：伊藤 寿、輪田龍治、近藤宏哉、山上征夫
 発表論文等：ブドウ「巨峰」の樹体生長および果実品質に及ぼす夏季せん定の影響
 園学雑62別2、1993